

「研修会等名称」

**2016 年度 TOEIC®セミナー**

主体的な学びを引き出す TOEIC® Program の活用—その先にある発信力の強化—

場所：ベルサール半蔵門 イベントホール (東京都千代田区)

期間：2016 年 8 月 5 日 (金)

1. 研修の内容

本研修は、日本で TOEIC®公開試験を運営している一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会が主催したもので、大学・短期大学の管理職および教職員を対象としたものであった。

学生に英語を主体的に学ばせるためにどのように TOEIC®を英語の授業に取り入れているかの報告、および TOEIC®の問題作成を行っている Educational Testing Service (ETS) のスタッフによる TOEIC® Speaking & Writing Tests の問題や採点方法の説明を中心としたセミナーであった。セミナーのプログラムは、以下のとおりである。

-----  
13:30 ・開会挨拶、IIBC からの報告

13:45 ・事例発表①

「学生の気付きを引き出すための TOEIC® Listening & Reading Test の活用」

早稲田大学商学部教授 森田 彰 氏

早稲田大学商学部教授 鈴木 利彦 氏

14:35 ・事例発表②

「グローバル社会に対応しうる英語 4 技能育成を目指して」

群馬県立女子大学国際コミュニケーション学部教授 細井 洋伸 氏

15:25 ・休憩

15:45 ・「TOEIC® Speaking & Writing Tests の採点方法および “タスク” の紹介」

Educational Testing Service (ETS) Ms. Alyssa Francis

16:20 ・模擬授業

「TOEIC® Speaking Test のタスクを活用した技能統合型授業実践の一例」

TOEIC® Propell Workshop Instructor、東京海洋大学グローバル人材育成推進室特任准教授 横川 綾子 氏

16:50 ・IIBC からの連絡

17:00 ・閉会  
-----

以下、各発表について書き記す。

## 【1. IIBC からの報告】

講師の発表の前に、TOEIC®の日本での運営団体である 一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会 (The Institute for International Business Communication: IIBC) から重大な発表がなされた。

このセミナーがあった 2016 年 8 月 5 日より、TOEIC®の名称を変更することである。これまでは、「TOEIC®テスト」というと、従来からあるリスニングとリーディングを中心としたテストを指し、スピーキングとライティングを中心とした「TOEIC®スピーキング/ライティングテスト」は、どちらかという TOEIC®の特別版という扱いだったが、この日より、TOEIC®テストはリスニング/リーディングテスト、およびスピーキング/ライティングテストを総称する名称とし、従来 TOEIC®テストと呼んでいたリスニング/リーディングテストは「TOEIC® Listening & Reading Test」と呼び (リスニングとリーディングは片方だけ受けることができないため、単数形の “Test” が用いられる。略称: TOEIC® L&R)、スピーキング/ライティングテストは「TOEIC® Speaking & Writing Tests」と呼ぶとのことである (スピーキングとライティングのテストを別々に受けることができるため、複数形の “Tests” となる。略称: TOEIC® S&W)。詳しくは、次の表のとおりである。

総称	テスト ブランド	個別テスト 正式名称	短縮名称
TOEIC® Program	TOEIC® Tests	TOEIC® Listening & Reading Test	TOEIC® L&R
		TOEIC® Speaking & Writing Tests	TOEIC® S&W
		TOEIC® Speaking Test	TOEIC® Speaking
		TOEIC® Writing Test	TOEIC® Writing

つまり、今後は TOEIC®は単にリスニングとリーディングといった受身の英語学習の熟達度を測るテストではなく、スピーキングとライティングといった発信型の英語学習の熟達度も測るテストであることをアピールすることになる。また今回の名称変更は、社会でスピーキングやライティングといった発信型の英語の運用力が求められていることのあらわれでもあると思われる。我々、大学の英語教育に従事する教員にとっても、この社会の流れを十分考慮に入れて、大学における効果的な英語学習の形を考えていく必要があると改めて認識させられた。

## 【2. 事例発表① 早稲田大学 森田氏・鈴木氏 講演】

早稲田大学商学部において、どのように学生の英語学習に対するモチベーションを高めるように工夫しているか、また学生に主体的に学ばせるように仕向けるためにどのような試みを行っているかの説明と、学生の授業アンケートの結果やコメントについて紹介された。

発表のタイトルに「学生の気付きを引き出すための TOEIC®Listening & Reading Test の活用」とあったため、どのように TOEIC®を授業で活用しているのか具体的な話が聞けると楽しみにしていたが、TOEIC®を使っているという報告のみで、具体的に「どのように」使っているかの説明がなかったのが、実に残念であった。

しかし、いま英語教育の分野で盛んに言われている「アクティブラーニング」を積極的に取り入れた授業運営をしていることがよく分かった。特にリーディングの授業の運営方法について紹介があったが、よくなされるように、授業で教員が学生を指名しながら英文の解説をしていくような授業ではなく、英字新聞を多用し、LMS (学習管理システム) を用いて学生に単語や熟語の意味調べや日本語訳を「予習」として課す形で行う授業は、学生に自分で予め授業で扱う英文を読ませるシステムをうまく構築できている。共通教育英語の授業において、どのように学生に予習をさせるかは大きなテーマであり、ぜひ参考にさせていただきたいと思った。

### 【3. 事例発表② 群馬県立女子大学 細井氏 講演】

細井氏が勤務する群馬県立女子大学国際コミュニケーション学部における英語教育プログラムにおいて、どのように TOEIC®を活用しているかの報告と、同大学同同学部の英語カリキュラムについて詳細な説明があった。参考にさせていただくべき項目がたくさん盛り込まれた、たいへん勉強になる話であった。

群馬県立女子大学国際コミュニケーション学部では、2006年度より、学生全員が卒業までに TOEIC®リスニング/リーディングテストで 730 点以上取得することを目指しているとのことである。また、2014 年度の学部創設 10 周年を機に、この基準を見直し、上記の目標に加えて、卒業までに TOEIC®リスニング/リーディングテストの学年平均を 800 点以上にするという目標を設定したそうである。

この目標にまだ少し及ばないものの、講演で提示された同大学同同学部の平均スコアは、大学 1 年生のスコア平均が 478.3 点、大学 4 年生の平均スコアが 734.6 点であった。TOEIC®のスコアだけで学生の英語力を全て判断するのは拙速だが、少なくとも、1 年次と 4 年次と同じ物差しである TOEIC®テストを受け、スコアがかなり上昇していることから、学生の英語力の伸びに同大学同同学部の英語指導が効果を上げているという評価を与えてよいと考える。

また現在では、TOEIC®スピーキング/ライティングテストも導入しているとのことで、1 年次から 3 年次まで毎年 1 回、同テストを受験するとのことである。

このように TOEIC®を積極的に取り入れているものの、英語カリキュラムを構築するに当たっては、TOEIC®リスニング/リーディングテスト対策が中心とならないように十分配慮したそうである。英語カリキュラムには 4 技能の科目をバランスよく配置し、カリキュラム全体としての体系性を確保するよう心掛けたとのこと、「トラック」と呼んでいる分野の指標を設け、各分野にコーディネータを配置し、それぞれの分野をしっかりと意識したカリキュラム作りを行ったとのことである。この「トラック」には、以下の項目が並んでいる。

- ・ 言語知識、文法、発音、話す、聞く、読む、書く、TOEIC、上級スキル

各トラックに配置された科目名称を見ると、英語学や英文学、英米文化に関する科目は殆どなく、英語のスキルアップの科目が並んでいる。このことから、学生の英語力を上げることに力を入れたカリキュラム作りを目指したことがよく分かる。

細井氏は、以下のような 10 個のキーワードとともに、同大学同同学部のカリキュラムについて、詳細な説明を行った。

- ① 緩やかなテーマ中心のカリキュラム編成
- ② 少人数制
- ③ 高い英語ネイティブ教員率
- ④ TOEIC® Program を用いた習熟度別クラス編成
- ⑤ TOEIC® Speaking & Writing Tests
- ⑥ 100 万語英語多読プログラム
- ⑦ 英字新聞で英語を学ぶ Current News Issues
- ⑧ Honors English Program と英語基礎自律学習
- ⑨ 英語資格試験による単位認定
- ⑩ 夏季集中講座 STRIPE

① については、先に挙げた分野（トラック）の間に関連性を持たせるということを重視している点を説明された。ライティング、ディベート&ディスカッション、プレゼンテーションなどの授業で、なるべくリーディングやリスニングの授業テーマに関連した題材を選択してもらえよう、リーディングとリスニングの授業では、テーマベースの教科書を選ぶように心掛けているそうである。これを細井氏は「緩やかなテーマ」と呼んでいるようである。

② については、小規模な県立大学だからこそできることかもしれないが、少人数

で英語の授業を運営していることを説明された。文法、リーディング、リスニング、ディベート&ディスカッション、発音、プレゼンテーションの授業は 18 名から 20 名程度で 1 クラスを構成し、スピーキングやライティングのクラスは 12 名から 13 名程度で 1 クラスを構成しているそうである。受講者全員に目を配らせることができる語学学習にとって非常に理想的な環境である。

③ については、同大学同学部の専任教員 8 名のうち 2 名が英語母語話者教員（アメリカ・イギリス）であり、これに加えて、外国語教育研究所研究員が 6 名、非常勤講師が 9 名で、この人員配置により、学部英語授業における英語母語話者教員担当の比率が 70% から 80% 程度になるように努めているとのことである。常に英語を使う環境づくりを目指していることが窺える。

④ については、TOEIC<sup>®</sup>リスニング／リーディングテストを用いて習熟度別クラス編成を行っていることが紹介された。1 年生は TOEIC<sup>®</sup> IP テスト（リスニング／リーディングテスト）を年 3 回、2 年生から 4 年生は同テストを年 2 回受けるそうである。また、TOEIC<sup>®</sup> IP スピーキング／ライティングテストについては、1 年生から 3 年生まで年 1 回受験し、これらの成績に基づき、学期ごとにクラスの編成を行っているとのことである。このように、学生には常に TOEIC<sup>®</sup>の成績を意識づける試みが行われている。ポートフォリオも用いて、学生に自分の英語力の伸び（TOEIC<sup>®</sup>のスコアの伸び）を常に意識させる試みも行っているとのことである。

⑤ については、英語の 4 技能をバランスよく習得することを目指して、TOEIC<sup>®</sup>スピーキング／ライティングテストを積極的に導入したことが説明された。

⑥ については、学生の TOEIC<sup>®</sup>のリーディングのスコアがリスニングのスコアより 80 点ほど低いことを問題視し、英語の読解力を鍛えるべく、この 100 万語英語多読プログラムを導入したことが説明された。英語の多読（Extensive Reading）を推奨し、学生全員卒業までに 100 万語読むことを目標としているそうで、辞書なしで読める教材を学生に選ばせて、一語一語読んでいくのではなく、ある程度のスピードで、意味のまとまりをつかみながら読んでいく意識付けをしているとのことである。

⑦ については、英字新聞（*The Japan Times On Sunday*）を定期購読して、新聞記事に基づきディスカッションやプレゼンテーションをすることにより、英語のリーディングやスピーキングの力を伸ばす指導をしていることが紹介された。本授業内活動により、高度な英語力が身につくだけでなく、国内外の政治・経済情勢を知ることでもできるため、就職活動対策としても効果があるとのことである。

⑧ については、TOEIC<sup>®</sup>リスニング／リーディングテストのスコア 800 点以上の学生を対象に、リーディング、リスニング、ビジネス英語ライティング、ジャーナリズム英語のハイレベルのクラスを展開していることが紹介された。またその逆で、TOEIC<sup>®</sup>リスニング／リーディングテストのスコアを見て、ひとりで学習を進めることが難しいと判断された学生は、専任教員がマンツーマンで学習サポートするという英語を苦手とする学生のケアもしっかりと行っていることが紹介された。

⑨ については、実用英語技能検定（英検）と TOEIC<sup>®</sup>リスニング／リーディングテスト、TOEFL<sup>®</sup>、IELTS<sup>®</sup>、国際連合公用語英語検定試験で単位認定していることが紹介された。同大学同学部が目標としている数値である TOEIC<sup>®</sup>リスニング／リーディングテスト 800 点に達した学生は、2 単位が認定されるようである。更に高いスコアを有する学生には、更に多くの単位が認定される。

⑩ については、Summer-Term Rapid Improvement Program of English、通称 STRIPE と呼ぶ夏季休暇中に行っている集中授業について説明された。夏季休暇中に 2 週間にわたり、毎日 6 時間の授業を行っているそうである。学生の弱点補強が目的で、リーディングの強化と TOEIC<sup>®</sup>リスニング／リーディングテスト対策の演習を行っているとのことである。

このように、TOEIC<sup>®</sup>を中心に据えた英語カリキュラムにより、学生の英語力が飛躍的に上がっていること、また留学に対する意識付けとなっていることが、グラフ化した詳細なデータとともに説明された。同データは、同大学同学部のホームページでも公開しているとのことである。

#### 【4. ETS の Francis 氏による講演】

ETS で 2008 年より TOEIC®テスト開発に従事している Alyssa Francis 氏より、TOEIC®スピーキング/ライティングテストの説明と、採点の基準について、事例も交えながら詳細に説明された。Alyssa Francis 氏は、2014 年 8 月に愛知大学名古屋校舎に来てくださり、同様の説明をしてくださったことから、私は初めて聞いた話ではなかったが、同テストの中身と採点基準を再認識するいい機会となった。

#### 【5. 東京海洋大学 横川氏による模擬授業】

東京海洋大学海洋科学部で英語の授業を担当している横川氏が、TOEIC®スピーキングテストのタスクをうまく活用したスピーキングの模擬授業を行った。同大学同学部は、4 年次の進級要件として、3 年次の終わりに TOEIC®リスニング/リーディングテストで 600 点を取っている必要があるそうである。横川氏は、テストを念頭に置いた指導というのは、良い面と悪い面があることを講演の冒頭で説明された。良い面 (Pros) はスコアという数値により学習効果が測れることであり、悪い面 (Cons) はスコアゲームになってしまうきらいがあるという点である。ただし横川氏は “It depends on the test, and its tasks.” (テストとそのタスク次第) という点を強調して、そのテストのタスクをうまく活かして授業を行えば、学習効果も上がり、且つテストのスコアアップにもつながる効果的な指導ができることを強調し、その考えに基づいて、学生を用いて模擬授業を行った。

模擬授業に参加した学生は東京海洋大学の学生で、授業の内容は全く知らせず、今回の講演の場でいきなり授業を行ったとのことである。英語の運用力に長けた横川氏ならではの非常にアクティブな授業を拝見し、学生から英語の会話を引き出す効果的な術を学んだ。

## 2. 研修の成果

2014 年にも、この一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会による TOEIC®関連のセミナーに参加したが、そのときも他大学でどのような英語の授業 (とりわけ共通教育英語) を行っているかがよく分かり、たいへん勉強になったが、今回も他大学の英語の授業やカリキュラムについてよく分かる、たいへん有益なセミナーとなった。

中でも、細井氏の群馬県立女子大学国際コミュニケーション学部の TOEIC®リスニング/リーディングテストおよび TOEIC®スピーキング/ライティングテストの活用事例と、それに基づく英語カリキュラム作りは、参考にさせていただく点が多数あり、たいへん勉強になった。

英語を専門とする学部の話ではあるが、私が本学で携わっている共通教育英語科目についても応用できる、示唆に富む話であった。TOEIC®のスコアを様々な判断基準にはするが、授業自体は TOEIC®のスコアを上げることだけに終始しない点は、たいへん共感が持てる点である。TOEIC®至上主義になってしまい、授業でも「TOEIC®でいい点を取るには…」という形で、TOEIC®のスコアアップを目指した英語の授業をしてしまうと、木を見て森を見ないという非常に短絡的な授業になってしまう。TOEIC®リスニング/リーディングテスト、および TOEIC®スピーキング/ライティングテストのスコアを時系列的に見ていくなかで、学生がどの部分に苦手意識を感じているかを明らかにし、その部分を強化していくようなカリキュラム作りをしていくというのは、学生の英語力をしっかり見据えた非常に理想的なカリキュラム作りであると思われる。

確かにこれは、学生人数が少なく、それに応じて教員数も少ない小規模大学小規模学部だからこそできることかもしれない。同じようなことを本学の規模で行うこと、ましてや共通教育英語科目で行うことは、かなり難しいことであろう。しかし、本学では TOEIC®リスニング/リーディングテストを 1 年次と 2 年次の終わりに全学部全員受験させているものの、その結果をまだうまく活用できていないという点



は否めない。先にも挙げたように、もちろん TOEIC®のスコアは学生の英語力全てを反映したものではないことは明らかであるが、その一方で、時系列的に見ることができスコアを英語学習に活かしていないのはもったいないところでもある。「スコア至上主義」ではなく、あくまでも TOEIC®のスコアを、更に大きな体系的な枠組みの中での一つの指標として活用するという群馬県立女子大学国際コミュニケーション学部のやり方は、その意味で非常に参考になる形であり、ぜひ本学でもこのようなことができないか、本学名古屋校舎・英語共通教育の組織である第1外国語(英語)分科会の皆さんとも検討していければ... と考える。

また、今回、TOEIC®の名称変更を、一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会の方から直接、その理念とともに、詳細にわたり聞くことができたのは、たいへん有益であった。たまたまセミナーと名称変更のタイミングが一致したために起こったことであったが、その名称変更に関して意図するところを知り、大学教育においても発信型の英語力を高めていく必要性が生じることを認識できたことは、今後のカリキュラム構築、および自分自身の英語の授業においても、たいへん役に立つことである。

TOEIC®スピーキング/ライティングテストは私も受けたことがあるが、当初想定していたよりも良いテストで、スピーキングおよびライティングの力のある程度的確に測ることができる試験であると感じている。廉価なテストではないため、本学で大学負担により全員に受験させることは難しいと思うが、先に挙げたように、TOEIC®がリスニング・リーディングのテストだけではなく、スピーキング・ライティングも加えた4技能の試験であることがより明確になったことから、将来的には本学の学生に TOEIC®スピーキング/ライティングテストも受けさせることができるような形にしていれば、たいへんありがたいことである。

### 3. 授業への研修成果の反映状況

まだ秋学期の授業が行われていないこともあり、研修成果をすぐに授業に反映することはできていない。しかし、今回の研修を受け、リスニング・リーディングといった受容型の英語学習だけではなく、スピーキング・ライティングといった発信型の英語学習も強化していかなければならないことが明らかになり、そのことを念頭に置いた授業づくりをしていかなければならないという思いが強くなった。

私は、担当している授業がバラエティーに富んでおり、英語の授業は Reading, Practical English (リスニングを中心とした授業)、Writing, TOEIC... といったように、4技能のうちスピーキングを除く授業を全て担当している。今回得た知見をこれらの個々の授業で具体的に活かしていくとともに、それぞれの授業をどのように体系的に結び付けていくか... という視点も、長期的には考えていきたいと思っている。